

目次

I さんぼみち

Kleiner Spaziergang

へろへろの一夜に 8

十年パスポート II

君は誰？ 故郷はどこ？ 14

なんちゃってチャレンジャー 17

へんてこ任侠伝 20

あのことろ住んでいた町 23

夏の過ごし方 26

エルベ川の水源 29

ワン・チャンス 32

元氣な修道女たち 35

「らせん館」のひとびと 38

宿題が終わらない！ 41

オーケストラの魅力と功罪 44

誤解でございます 47

びっくり紳士 50

「後ろ」が気になる 53

掃除機の色は白 56

ずっとこけバレーボーラー 59

間違いだらけの就活 62

師匠は大学生 65

フリーハグ推進委員会？ 68

なりきり小公女 71

校閲者は偉大である 74

人生の反省期 77

我が家の五大ニュース 80
最後のクリスマス 83

II 日々のことと、おもいで Alltägliches, Erinnertes

- 無計画な大学院生 88
日の当たる掲示板 93
子連れ・おばあちゃん連れ留学 97
マイネ・ムッター・イスト・ニヒト・ダー(母はおりません) 102
ほめまくり、叱られまくり 107
突然の一人旅 112
ドイツのビッグ・シスター 119
『朗読者』の原作者、シュリンク氏 124
登場人物のその後 129

- クリスタ・ヴォルフのこと 134
ベルリンの壁の思い出 139
瓦礫がれきの話 146
たった一枚のCD 152
絶叫はしないけれど 157
きょうも坂道ダッシュ！ 162

III ほんだな Mein Bücherregal

- ぶつ切りセンチメンスの威力。 168
「読む」から「聴く」文学へ——ライプツィヒの書籍見本市を訪ねて 171
逃げてゆく愛、追いかけてくる歴史 175
ひそやかな仮説 179
愛しい人 183

I — さ ー ぼ み ち

Kleiner Spaziergang



イラストレーション 樋口たつの
ブックデザイン 鈴木成一デザイン室

あとがき 210

戦争と幽霊	188
泡になって終わり、ではない人魚の姫	191
現実を投影する文学の力——アーザル・ナフィーシー「テヘランでロリータを読む」	193
「見る人」の多彩な魅力	195
世界の周縁から放たれる静かで鋭い光——中村文則「掏摸」	197
文学観はかる指標に——村上春樹「1Q84」	202
短編映画のような詩集——井川博年「幸福」	205
お茶目で一途な恋愛小説——森見登美彦「夜は短し歩けよ乙女」	207

へろへろの一夕に

大学の教員は時給がいい、という話がどこかに載っていたそうだ。ほんとうだろうか。そんなことを書いた人は、授業だけが教員の労働時間だと思っただけではないか。

大学には（もしかしたらわたしの勤務先だけかもしれないが）、ながーい会議がある。ずっと座っているとエコノミー症候群になりそうなくらい長い。入試の監督という退屈な仕事もある。暇だからといって本を読むこともできず、受験生たちを見つめていなくてはならない。入試の採点も辛い。何千枚も根を詰めて採点するので、採点した問題が夢に出てくる。卒論指導もしなければならず、個別指導なので結構時間がかかる。授業だって、教壇に立てば自然に言葉が出てくるわけではなく（そういう人もなかにはいるだろうが）、口下手なわたしは九十分の講義のために何時間も準備が必要である。そのわりに大した授業ができなくて、いつも落ち込んでいます。

最近では、オープンキャンパスと呼ばれる行事もある。高校生向けに大学を紹介するイベントだ。その日は一日中大学にいて、自分が所属する論系（学科のことです）の説明をし、質問に答えなくてはいけない。

さらには学会の仕事もあるし、本来なら研究もしなければいけない。でも、あまり時間がとれてない現実が悲しい。大学の教員は一日十二時間労働、というのが自分の実感だ。

先日、午前・午後で三コマの授業をこなし、卒論指導もして、へろへろに疲れて帰途についた。夜の九時過ぎに家のそばの停留所でバスを降りたら、驚いたことに門がまだ開いていた。我が家の門ではなく、ホテルの飼育施設の門である。都内にこのような施設があることは、あまり知られていないのではないかと思う。ビニールハウスに田舎の溪流を再現して、一年かけて育てたホテルを、毎年六月と七月に公開している。公開はいつも夕方から（ホテルなので、暗くならないと見えない）。「都会のオアシス」と銘打たれ、公開日にはいつも行列ができる。わたしも何度か並んでホテルを見たが、七月公開の平家ホテルしか見たことがなかった（六月は源氏ホテルを公開）。それが、公開日だということを知らずにたまたまバスを降りたら、まだ門が開いていて、おまけに誰も並んでいなかったのである。

「入れますか？」と訊いたら「大丈夫」とのこと。係の人は、わたしが入った後で門を閉めていた。幸運にも最後の一人となれたのである。いつもは行列にぐっついて、人とぶつ